

【1】

煌びやかなステージ、ファンの人達が作り出すペンライトの海――

世間でも徐々にその名を広め始めたアイドルグループ「アイリス」のセクターを務めるヒカルは、ステージから見えるファンの嬉しそうな笑顔と黄色い歓声を浴びて、今日のライブへの手応えを感じ心の中で小さくガッツポーズをした。

続いて、左右に立つメンバー、真一（しんいち）・竜司（りゅうじ）とも目を合わせる。二人とも高身長なので、自然とヒカルは上を見上げるような形になる。

サラサラの真ん中分けした黒髪が似合う、爽やかで優しげな笑顔が魅力の王子様タイプの真一。

ギリシャ彫刻のような筋肉に、全てを射抜くような鋭い眼光と金髪がトレードマークの竜司。

二人とも、額に汗を浮かべながら、ヒカルと同じように達成感に満ち溢れた爽やかな表情をして、にこりと愛おしげな顔でヒカルに微笑み返した。

その尊すぎる光景に、客席からは再び黄色い歓声や喜びのため息が溢れ出る。

この3人でなら、きつともつと高みを目指せる。

まだまだ大きな世界に行ける。

ヒカルはそう信じて疑わなかった。

ただ、一つの不安を除いては……—

ステージ裏に移動してすぐ、ヒカルの腰に竜司の手が添えられた。

片手で触れられているだけなのに、熱くて、ガツシリと全てを掴まれたようにうまく動けなくなる。

「来い」

低く唸るようなその声は、さっきまでファンに見せていたアイドルの竜司とは別人の、ギラリとした雄の顔をしている。

「……っ」

その声に、ヒカルの身体はまるで抵抗できない魔法でもかけられたかのように硬直し、竜司に腰を抱かれるままに、人の気配がしない空き楽屋の方へ連れて行かれる。

（どうか、真一には見られていませんように……）

これから自分がどんな目に遭うのか既に知っているヒカルは、そんな事を祈ることしかできなかった。

ドアが静かに閉められ、楽屋の中は急に世界から切り離されたような静寂に包まれた。

竜司は無言のまま、ヒカルを壁際へと追い詰め、片手を壁につくと、そのまま体を寄せる。

顔が近い。息がかかるほどの距離。金髪の隙間からのぞく瞳が、鋭くヒカルを射抜いた。

「ほら、さっさと口開けろ」

「……」

低く喉の奥で笑い、竜司の手が光の顎をそっと持ち上げる。

「無駄な抵抗すんなって、何度もその身体に教えたよな？」

「……っ……」

やわやわと唇を指で弄ばれると、ぞわぞわとヒカルの身体に甘い疼き走る。

「……それとも、バラされてえの？…ヒカルが、本当は女だってコト」

「……それは……やめて……」

「ちゃんとお願ひしないと。やめてください、だろ」

「……やめてくだ、さい」

「じゃあ、服従な。ほら舌出せ」

ヒカルが観念したように、だがそれでも少しの抵抗を見せながら控えめに舌を見せると、竜司はそれを吸い出すように強引に唇を奪った。

唇の柔らかさを確かめるように、舌が割り込んできて、口の中をかき乱す。

舌を強い力で吸われると同時に、ヒカルの足に力が入らなくなっていく。

じゅるっ♡じゅじゅじゅじゅっ♡くちゅくちゅ♡

「…っふっ、あっ♡」

「キスだけでそんなトロ顔しやがって、…淫乱だな、ヒカル」

「違…っ」

竜司が満足そうにこちらを見る視線に、ヒカルは羞恥で顔を赤くする。

「じゃあ、これはなんだよ？」

竜司の手がヒカルのズボンの中に滑り込み、下着越しに股間をまさぐる。そこは既に湿り気を帯びていた。

くちゅ♡くちゅ♡♡

「…っ！」

「キスだけでこんなにまんこ濡らしてんじゃねえよ」

卑猥な水音が部屋に響き、ヒカルの耳すらも犯していく。

「あっ♡あっ♡やだっ♡」

「嫌じゃねえだろ、ヒカルは本当は、淫乱なメスだもんな？」

竜司の長い指がヒカルのまんこの奥をとんとん♡と刺激し、そのまま乱暴にぐりぐり♡ぐちゅぐちゅ♡と掻き回す。わざと音を響かせるように、何度も、何度も。

ヒカルの身体はびくびくと痙攣しながら、もう立っていられないとばかりに竜司の腕にしがみつくしかできなくなる。

「ヒカルのまんこ、もう欲しがってんな？」

「やあっ……♡」

ふるふると力無く首を振っても、荒々しい愛撫は止まる気配がない。

「まったく、エロい顔しやがって……そんなメス顔で、よく俺たちのこと、騙せると思ったな？」

「だ、騙す気なんて、社長がっ……」

「わかったわかった、まあ俺も感謝してっからいーよ、ヒカルの事は最初から犯してえとしか思ってたし」

「……っそんな……っ」

「まさか女だったなんて、俺に犯してくださいって言うてるようなもんだろ」

ぐちゅぐちゅぐちゅ♡とんとん♡ちゅくちゅくちゅく♡

「あーっ♡もうっ、だめえ……っ」

ヒカルがぐずぐずに溶かされた顔になったのを見て、竜司はその鋭い色気を孕んだ瞳で冷たく笑った。

「ほら、イク時はなんて言うんだ？教えたよな？」

竜司の低い声で耳元で囁かれるだけで、まんこからとろ♡と汁が流れ落ちる。

「……っ」

「言え」

ぐちゅぐちゅぐちゅっ!!♡♡♡

竜司の骨ばった長い指がさらにまんこの奥をぐりぐり♡と刺激し、屈服させるように荒々しく膣壁を叩かれ、ヒカルはもう限界だった。

「あっあっ♡いくいく♡イきますっ♡」

びくん！びくっ！びくびくっ♡♡♡ヒカルの腰が大きく跳ね、そのまま竜司の腕にもたれ掛かるようにしてくったりと脱力した。

「……その顔エロすぎ、アイドルがしちゃダメだろ笑」

「……っだって、竜司が……っ」

「じゃあ、俺のでかちんぽでずぼずぼされて、もっと馬鹿になろうな？」

「……もう、やあっ……♡」

はあはあと息を整えようとしているヒカルを休ませることなく、竜司は衣装を乱暴に脱がし、白い肌が顔になった状態で自分の膝に乗せた。

ヒカルは下半身裸のまま、抵抗もできずされるがままだ。

「まんこは準備万端みてーだぞ」

竜司は自分の隆々と血管が浮いたちんぽを取り出すと、ヒカルに見せつけるようにずちゅ♡ずりゅ♡とまんこに擦り付けた。

「ヒカルにはこんなちんぽ生えてないから、これでドチュドチュまんこ突かれて、イキまくりたいよな？」

最後のわずかな抵抗かのように、ヒカルは細い腕で竜司の胸を押し返そうとするが、全く筋肉量の違うその身体はびくとも動かない。

「抵抗すんなって言っただ、ろっっ！」

ぐちゅんっ♡♡♡

膝の上で向かい合ったヒカルの上半身をいとも容易く持ち上げた竜司は、無理やりその脚を広げ、一気に根本まで突き刺した。

「あ——っ♡♡♡」

挿れられただけでまたイッたのか、膣内がきゅううつ♡と締め、竜司のものを離すまいとして絡みついてくる。

「挿れられただけでイクなんて、ヒカルのエロまんこ、最っ高」

「やっ♡言わないでっ♡」

ヒカルのを腰を持ち直し、竜司は壁に押しつけて逃げられないようにし、そのまま乱暴に腰を動かし始める。

ぐちゅんっ♡♡ずちゅずちゅっ♡ぱちゅんっ♡♡♡どちゅどちゅどちゅっ！♡♡♡

「あっあっあッ♡♡やだあっ♡♡」

「締めりがいいくせに、俺のちんぽの形すっかり覚えさせられて、何度も犯しまくった甲斐あるわほんと」

狭い楽屋にいやらしい音が響き渡り、それがまた二人の興奮を煽る。

ぱんっ！ぱんっ！ぱんっ♡♡と肉がぶつかる音が何度も響き、ぐちゅぐちゅ♡と竜司のものが出し入れされるたびに、ヒカルはビクビクと痙攣して喘ぎ声を漏らす。

「あんっ♡やっ♡やあんっ♡」

「ほら、ヒカルの淫乱まんこが大好きなちんぽだぞ？ちゃんとご奉仕しろよ」

「あっ♡♡しっしますうっ♡おちんぽ様ご奉仕するからあっ♡♡♡激しいのっ、どちゅどちゅやめてえっ♡♡」

ぱんっ♡ぱちゅんっぱちゅっ♡♡♡じゅぷんっ♡♡♡ずりゅずりゅっ♡♡♡♡♡

激しいピストンに容赦なくイカされて、ヒカルは意識が飛びそうになる。

今まで何度も覚え込まされてきた快感に、身体はもうすっかり抵抗する事を諦めてしまっている。

「そこ、やあっ♡♡♡ずっとイッてるからっ……♡♡♡」

「これ好きだろ？こーやって子宮の入り口とんとん♡されんの」

「おっっ♡♡おっおっ♡♡そこダメっ、おほお♡♡」

「おほ顔やべえな笑やっばお前雑魚まんこすぎ笑」

どちゅんっ♡どちゅんっ♡ずりゅん♡と突かれるたびに膣内が痙攣し、またきゅううっつと締め付けてくる。

「あっ♡♡あっ♡♡またイッちゃうっ♡♡」

「イケよ、おら、イケ♡イケ♡イケ♡」

どちゅ♡どちゅ♡どちゅ♡どちゅ♡どちゅ♡

竜司がさらに激しく腰を振り、子宮口まで一気に貫く。

ぐりゅりゅうつ!!どちゅんっっっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

「おほおおおお♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

ぷしやああっ!と勢いよく潮を吹きながら、ヒカルは深いアクメに達した。

「はあーっ……はあっ……♡」

もう気を失う寸前のヒカルを見下ろしながら、竜司はその身体を抱き寄せた。そしてそのまま、備え付けのソファに座るように引き寄せて、対面座位になって下から突き上げるようにピストンを始める。

「ヒカルのイキまくり変態まんこ、まだまだ気持ちよくなりたいよな?」

ばちゅんっ♡どちゅんっ♡ずっちゅん!♡♡ぱちゅっぱんぱんっ♡♡♡♡

「あっああッ♡♡♡もう無理い……っ♡♡」

激しい突き上げに絶頂から降りて来られないまま、ヒカルは竜司に抱きつくことしか出来ずそのまま意識を手放した――